

アイスランド語ストレスアクセントの史的研究 -文献資料とフィールドワークに基づく試論-*

三村 竜之

Preliminaries to the Historical Study of Icelandic Stress -- Based on Philological and Descriptive Researches --

MIMURA, Tatsuyuki

Abstract: In Icelandic, the primary stress as a rule falls on the first or left-most syllable of a word; any information on parts of speech, origins (i.e. native words/loanwords), the number of syllables, and (internal) structures (i.e. simplex/compounds) of a word is of no relevance. Although tremendous number of historical studies have been made on Icelandic, almost no academic attention has been paid to diachronic aspects of accent. The aim of this paper is thus to shed light on the historical development of Icelandic accent from the Early Middle Ages, and to reveal what sort of accentual system the language formerly had and several synchronic mechanisms behind the historical development, based on data both collected from written materials and elicited through field researches. The findings of the present study are as follows:

- a. Old Icelandic had a single-pattern stress accent system; the primary stress falls on the first syllable of a word. The arguments are:
 - (i) No mention nor linguistic description was made on the stress system in Old Icelandic grammar, its commentaries/manuals, and comprehensive introductions.
 - (ii) No non-initial stress patterns were found in Old Icelandic poetry.
- b. Modern Icelandic inherited and retains the stress accent system of Old Icelandic. The arguments are:
 - (i) The single-pattern system is the result of convergence.
 - (ii) The motive for the convergence is to produce a more unmarked and economical system.
 - (iii) For a morphological reason, assigning the primary stress on the ultimate syllable is avoided.

Keywords: single-pattern stress accent system, historical development, Danish and Sandnes Norwegian, loanwords, markedness, convergence, economy

* 本論文は、日本音韻論学会音韻論フォーラム 2020 での筆者の口頭発表（三村 2020a, 2021 近刊）の内容に追加・修正を加えたものが基盤となっている。同口頭発表に有益なコメントを下された聴衆諸氏、特に次の方々にこの場をお借りしてお礼を申し上げます：高山知明先生（金沢大学）、田中雄先生（同志社大学）、時崎久夫先生（札幌大学）。なお、本論文は、日本学術振興会科学研究助成費の支援を受けた研究課題（課題番号: 20K00594）の成果の一部である。

1. 序

1.1 本研究の背景と問題の所在、目的

本研究の目的は、文献資料とフィールドワークを通じて採取した現代語のアクセント資料に基づき、アイスランド語におけるストレス（強さ・強弱）アクセントの歴史の変遷の解明を試みることにある。

現代アイスランド語は、語種や品詞、屈折ならびに派生接辞の種類や複合語の内部構造の別を問わず、原則として語の第一（左端の）音節に主強勢の置かれる「一型（いっけい¹）ストレスアクセント」の言語である。系統を同じくするノルウェー語やスウェーデン語の諸方言に見られるような、（広義の）ピッチ（高さ・高低）アクセント（word tones/musical stress）は持たない。

アイスランド語は歴史的研究が盛んになされており、特に歴史音韻論の研究は極めて豊富であるが、その殆どが分節音や音節量・音節構造の史の変遷を対象としたものである（例：Hrein Benediktsson 1959, Kristján Árnason 1980）。アクセントの史的研究に関しては、ピッチアクセントがかつてアイスランド語にも存在したか否かを論じた僅かな論究（例：Haukur Þorgeirsson 2013, Kjartan G. Ottósson 1986, Myrvoll and Skomedal 2010）があるものの、ほぼ皆無に等しい。

アイスランド語は中世初期（12世紀頃）以降、韻文と散文の両面において文献資料が豊富に現存しているにも拘らず、文献資料の精査に基づくストレスアクセントの史的研究は未開拓の研究領域である。また、近代以降は、デンマークやノルウェーの統治下に置かれていたという事情から、教育・文化等を通じてデンマーク語とノルウェー語から、あるいは両言語を経由して、様々な外来語が流入しているが、この点を踏まえたストレスアクセントの史の変遷に関する論考は、管見の限りではこれまで一切なされていない。

このような事情に鑑み、本研究では、中世のアイスランド語（以下、古アイスランド語）の韻文資料とフィールドワークから得られた現代語のアクセント資料に基づき、中世から現代に至るまでのストレスアクセントの史の変遷にまつわる様々な問題点のうち、特に次の三点に焦点を当ててその解明を試みる：

- (1) a. 古アイスランド語のストレスアクセント体系はいかなるものであったか。現代語と同様に、一型体系であったか、あるいは多型体系であったか。
- b. 現代アイスランド語のストレスアクセント体系は、古アイスランド語のアクセント体系から変化しているか。
- c. 仮に変化が見られないとすれば、古アイスランドのアクセント体系を現代に至るまで保持し続ける言語学的な要因やその背後にあるメカニズムは何か。

1.2 古アイスランド語

本研究で考察対象の一部とする「古アイスランド語」について簡単に触れておく。現代の

¹ 本稿の Abstract と Keywords にて使用した「一型」の英語訳 ‘single-pattern’ は Uwano (2012) に倣った。

北ゲルマン語諸方言が使用されている地域において、およそ 700 年頃から 1350 年頃に使用されていたと推定される言語を「古ノルド語」と呼ぶ (cf. 清水 (2012:17-29))。古ノルド語は東西の二方言に大別することができ、西部方言の内、アイスランドで使用されていたものを、本稿では古アイスランド語と呼んでいる。ちなみに、アイスランドへの入植者の多くはノルウェー海岸部 (北・南西部) の出身であり、従って、古アイスランド語は古ノルウェー語の姿を独自に保持・発展させたものと言える (「参考資料」の項も参照のこと)。

1.3 現代アイスランド語概説

本研究のもう一つの考察対象である現代アイスランド語についても簡単に触れておく。アイスランド語はアイスランド共和国の公用語であり、推定される話者数は約 335,119 人である (人口の約 94%に相当; なお、2020 年 1 月時点での人口は 364,134 人 (典拠: *Hagstofa Íslands*))。印欧語族ゲルマン語派・北ゲルマン諸語 (ノルド諸語) の一言語。系統的にはノルウェー語 (特に南西部方言) に最も近い。他のノルド諸語に比して、形態論や統語論の面においては古語の複雑な姿を強く残す。

音韻論の面では、音素配列の傾向性 (例: 三つの子音からなる音節頭音の連結は常に /s/ で始まる) や強勢と音節量の相関 (例: 短母音開音節 (CV) は強勢を担うことは許されない)、閉音節における母音量 (母音の長短) と音節末子音の数との間の制約など、他のゲルマン諸語やノルド諸語に通ずる性格も有するが、無論、アイスランド語 (や一部のゲルマン語) に特有の現象もある。例えば、ノルド語の一部の方言にのみ観察される「前気音 (preaspiration)」 (便宜的に [ʰ] で表記) と呼ばれる現象がアイスランド語にもあり、また無声の共鳴音 (sonorant) も多いため、無声摩擦音が豊富であるかのような聴覚印象を与える。具体例²を以下に示す:

(2) a. 前気音 (三村 2014b):

(i) *Kaupmannahöfn* [kʰóçʰp.man.na.høɛpn̩] 「コペンハーゲン」

(ii) *pappirsbolli* [pʰáʰp.pĩrs.bòt.tʰĩ] 「紙コップ」

b. 無声共鳴音 (三村 2016):

(i) *fimmti* [fĩmtĩ] 「五番目の」; *hneta* [n̩ɛ:ta] 「ナッツ」; *banki* [báŋŋki] 「銀行」

(ii) *hjálpa* [jáŋpa] 「助ける」; *hljóð* [ʰjóð̥] 「音」; *stelpa* [stélpa] 「女の子」;

hraða [rá:ða] 「急ぐ」; *mars* [márs] 「三月」

2 アイスランド語のストレスアクセント

2.1 一型体系と多型体系

本節では、本稿で用いる「アクセント」や「一型体系」等の用語について、簡単に整理しておく³。言語学を修めた者であれば、言語の音形が分節音の音声特性のみならず、そこに被

² 以下、本稿において引用するアイスランド語の資料は、特に断りのない限り、全て筆者が聞き取り調査 (フィールドワーク) を通じて採取した一次資料である。2013 年から現在に至るまでインフォーマンとして尽力して下さっている Auður Guðmundsdóttir 氏 (女性・1955 年 Reykjavík 生まれ) にこの場をお借りしてお礼をお申し上げる。

³ ここで示す筆者の私見は、その殆どが、上野善道 (1980, 1989) に代表されるアクセント理論、並びに

さる音の高低や長短等の韻律的ないし超分節的特性 (prosodic/supra-segmental features) によっても形成されていることは、周知の事実であろう。このような韻律的特性が語の音形を形成し、かつ当該の語の任意の一箇所 (任意の音節、モーラ等々) に音声特性を指定するだけで語全体の卓立の型 (外形) を導くことができる場合を、筆者はアクセントと呼ぶ。語を形成する全ての音節 (あるいはモーラ) に逐一、音声特性を指定する必要のある声調 (例えば北京官話における四声) とはこの点で区別される。

語の韻律的な音形を決定する音声特性を「アクセント核 (accent kernels)」と呼ぶ。本稿で扱うアイスランド語はいわゆるストレスアクセントの言語であるため、より一般的な用語を用いて、(厳密には異なる概念ではあるが) ストレスアクセントのアクセント核をいわゆる主強勢 (primary stress) と読み替えても実際のところは支障はない。

さて、言語によってはアクセント核の置かれる位置に複数の可能性があるものの、その数が有限である場合もあれば、語が長くなる (音節数が増える) に従って核の位置の可能性が無限に増える場合もある。核により導かれる語全体の韻律的な型の数が、前者では有限個であるのに対して、後者では (理論的には) 無限である。日本語方言アクセント研究の分野では、前者を「N型アクセント体系」、後者を「多型アクセント体系」と呼ぶ (Nには任意の整数が入る)。この枠組みに従えば、アイスランド語は (原則として) 語の第一音節に主強勢が置かれ、型の数が一つのみであるため、「一型アクセント体系」の言語ということになる⁴。

2.2 一型ストレスアクセント

既に度々触れてきた通り、現代アイスランド語は一型ストレスアクセントの言語である。語における主強勢の位置は、原則として、下記の規則により決定される:

(3) アクセント規則 (cf. 三村 2014b)

品詞や音節数、語種、語構造 (複合語か否か、複合語であれば内部構造 (枝分かれ構造⁵) の別を問わず、第一音節 (左端の音節) に主強勢を付与せよ。

主強勢の位置に応じて語が対立することは一切ない⁶。

筆者が 2013 年以降 (但し、2020 年後半は除く)、年に数回実施している実地・聞き取り調

氏の理論に影響を与えたと考えられる川上 藤の一連の論考 (川上 1995 を参照) に依るものである。

⁴ 厳密を期すために付記するが、具体音声のレベルで現実に観察可能な卓立の型 (広義のアクセント型) と、抽象化を経て音韻論のレベルで認定される型 (狭義のアクセント型、アクセント核の付与規則と読み替えてもよい) とは区別しなくてはならない。例えば、古典ラテン語は、*honestus* や *domina* のように次末音節 (penultimate syllable) と前次末音節 (antepenultimate syllable) に強勢が置かれる (太字で記した箇所) という意味では複数のアクセント型を有すると言えるが、アクセント型の違いによって語の弁別はなされず、強勢の位置は「語末から数えて 2 音節目が長ければそこに、短かければ第 3 音節に置く」という一つの規則により導かれるため、ラテン語のアクセントは一型アクセント体系と捉えるべきである (cf. 上野 1986)。

⁵ 例えば三つの要素からなる複合語の場合、(各要素が意味的に対等である並列的複合語 (dvandva) を除いて) 左枝分かれ構造 ([[AB]C]) か右枝分かれ構造 ([A[BC]]) かの何れかの内部構造を採る。ここで言う「枝分かれ構造」とはこのような複合語の内部構造を指している。

⁶ 日本語方言アクセント研究の用語・概念として「無アクセント」があるが、本稿で筆者が用いる「一型アクセント」との混同に注意されたい。確かに、現代アイスランド語ではアクセントによる語の対立は一切ないが、これはアクセントが「無い」ということではない。第一音節に主強勢を置くというれっきとした型が一つではあるものの存在するという点で、むしろ積極的にアクセントを有しているのである。

査（フィールドワーク）を通じて、これまで約 600 語の基礎語彙と約 200 項目の外来語を採取した。アクセント資料の具体例を以下に示す（太字は主強勢の所在を示す、なお、外来語は参考としてデンマーク語とノルウェー語南西部方言の一つである Sandnes（サンネス）方言の資料も付した⁷（第 3 節の「資料・データ」も参照されたい））：

(4) a. 品詞⁸

(i) *dagur* [dɑːɣʏt̚ HL~FL] 「日、一日」

(ii) *hvítur* [kʰiː.tʏt̚] 「白い」

(iii) *brenna* [brén.nɑ] 「燃やす」

b. 音節数

(i) *grænn* [græ̃t̚n̩] 「緑色の」

(ii) *bolli* [bó(t)t̚.ʔi] 「カップ」

(iii) *herbergi* [hér.ber.gi] 「部屋」

(iv) *pelíkani* [pʰé(:).li.k^(h)a(:).ni] 「ペリカン」

c. 語種（外来語）

(i) *pappír* [pʰáhp.pɪ̃t̚] 「紙」

cf. ノルウェー語 Sandnes 方言: *papír* [pa.pʰiːt̚]

デンマーク語: *papír* [pɛ.pʰiːʔe]

(ii) *súkkulaði* [sú^hk.kʏ.lɑː.ðɪ] 「チョコレート」

cf. ノルウェー語 Sandnes 方言: *sjokolade* [ʃo.ko.láː.də]

デンマーク語: *chokolade* [ʃo.ko.léː.ðə]

d. 語構造（複合語）

(i) *sjónvarpa* [sʰjón.vɑ̃r.pa] 「放映する」

(< *sjón* [sʰjón] 「映像、光景」 + *varpa* [vɑ̃r.pa] 「投げる」)

(ii) *piparmynta* [pʰiː.par.mìn(:).ta] 「ペパーミント」

(< *pipar* [pʰiː.par] 「胡椒」 + *mynta* [mìn(:).ta] 「ミント」)

cf. *pebermynte* [pʰɛ̃.β.món.tə] (デンマーク語)

peppermunte [pe(p).pəβ.mýn.tə] (ノルウェー語 Sandnes 方言)

⁷ アイスランド語の資料と同様、本稿において引用するデンマーク語並びにノルウェー語 Sandnes 方言の資料も、筆者がフィールドワークを通じて採取した一次資料である。インフォーマントとしてこれまで（そして現在も）尽力して下さった（下さっている）以下の方々にこの場をお借りしてお礼を申し上げる：Martin Graugaard Hause 氏（デンマーク語・男性・1980 年 Jylland 半島の出身・2005 年から 06 年まで調査）、Evi Egholm 氏（デンマーク語・女性・1973 年 Sjælland 等の出身、Fyn 島にて生育・2004 年から現在まで調査）、Brede Tingvik Haave 氏（ノルウェー語・男性 1988 年 Sandnes 出身・2009 年から 2011 年まで調査）。各インフォーマントの生育地の地理的な詳細に関しては、Mimura (2009) と三村 (2014a) を参照されたい。なお、デンマーク語資料の音声表記中のアポストロフィ（'）は、stød と呼ばれる声門化（laryngealization）の一種をデンマーク語学の慣習に倣い表示したものである。

⁸ 音声表記に付した H, F, L の記号は、それぞれ「高平調 high-level tone」、「下降調 falling tone」、「低平調 low-level tone」を指す、なお、現代アイスランド語における音調の音韻論的な位置付けに関しては、本文第 2.3 節の「補記」を参照のこと。

2.3 補記: 現代アイスランド語の音調はアクセントにあらず

前節の資料 (4a.i) に示した通り、あるいは脚注 8 にて触れたように、アイスランド語では主強勢を担う音節には高平調 (high-level tone) や微弱な下降調 (falling tone) も現れうる。これらの音調は当該音節の構造や発話の速度等の状況によって決定される (例えば長母音を含む音節には下降調が現れやすい) もので、音調の型や向き (音調の遷移) は音韻論的に定まっていはいない。この点でこれらの音調は (広義の) イントネーション (の一種) と捉えるべきものであり、アクセントではない。

なお、参考として、ノルウェー語 Sandnes 方言におけるピッチ (高さ/高低) アクセントについて少し触れておく。Sandnes 方言もアイスランド語と同様、語には主強勢を担う音節が必ず一つあり、その音節には高平調 (語頭では微弱な上昇調もありうる) と下降調のいずれかが現れる (慣例的に前者を Acc (アクセント) 1、後者を Acc2 と呼ぶ)。屈折形や派生語を含めれば (擬似) 最小対は多数存在するが、純粋に単一の形態素からなる最小対は極めて希である。

具体例を以下に示す (三村 (2014a: 80), Acc1-2 の順) :

- (5) a. *leser* [¹lé:sø HL] 「読む (現在形)」 – *lese* [²lé:sa FL] 「読む (不定形)」
 b. *avtale* [¹á:v.t^hà:la HML] 「約束する」 – *avtale* [²á:v.t^hà:lə FML] 「約束」

既に触れた通り (4a.i) の *dagur* にも (5a) の語例と同様、[HL] や [FL] といった音調が現れうるが、アイスランド語の場合と決定的に異なる点は、[HL] と [FL] という音調がそれぞれの語に固有の特徴、つまりは入れ替えが許されないものであるということである。この点で、Sandnes 方言における音調はアクセントとして位置付けなくてはならない。

3 資料・データ

既に (1) で述べた通り、本研究は、現代アイスランド語との繋がりから古アイスランド語のストレスアクセント体系の解明を試みるとともに、現代語におけるアクセント体系の変化の有無とその背後にある要因を探ることが目的である。この目的を達成すべく、本研究では、以下に示す三種類の資料・データを論拠とする:

- (6) データ 1: 古アイスランド語で記された、あるいは古アイスランド語を扱った現代語による文法書、並びに前者の翻訳・解説書
 データ 2: 古アイスランド語による韻文資料 (古アイスランド語で記された文法書に収録)
 データ 3: フィールドワークを通じて採取した現代語のアクセント資料 (参考資料としてデンマーク語並びにノルウェー語 Sandnes 方言の資料も含む)

以下、上記のデータに関してそれぞれ詳しく説明していくことにする。

3.1 古アイスランド語による/に関する文法書、翻訳・解説書

まず、古アイスランド語によって記された文法書として、下記のもの参照した:

(7) *Fyrstamálfræðiritgerðin*

(Eng.: *First Grammatical Treaties*, 以下、*FGT* とする)

この *FGT* は英語訳では ‘Grammatical’ という語で呼ばれているものの、古アイスランド語のいわゆる形態統語論的な側面を扱ったものではなく、表記法（綴り）から当時の発音や音韻体系を探る、いわば古アイスランドの正音法 (*orthoepy*) や音素論の研究論文といった方がふさわしい（現に、最小対や音の分類表を示すところなどは、米構造主義言語学の音素論やプラグ学派の音韻論を彷彿とさせる (Hreinn Benediktsson (1972: 35), Robins (1979: 73))）。

執筆・編纂された年代は 12 世紀中葉、おそらく 1125 年から 1175 年の間頃ではないかと推定されている (Hreinn Benediktsson (1972: 22-33))。執筆者・編纂者が誰であるかに関してはこれまで様々な研究や議論がなされてきたものの、定説と呼べるものは未だ存在しない。

古アイスランド語で記された 14 世紀の文献に、アイスランド人の詩人、Snorri Sturluson が 1220 年ごろ (谷口 1973) に執筆したとされる詩の教本である *Snorra Edda* (『スノリのエッダ』(『散文エッダ』とも)) と呼ばれるものがある。この *Snorra Edda* が収録されている写本 *Codex Wormianus* (Copenhagen 大学 Arnamagnæansk Institut 所蔵, 写本番号 AM242, fol.) には四つの ‘Grammatical Treatise’ が収録されており、*FGT* はその内の最古のものとして推定される (Hreinn Benediktsson (1972: 14))。

なお、*FGT* は写本を直に閲覧することが可能であるが、2019 年末から流行を始めた新型コロナウイルス感染症の影響により、2020 年夏に予定していた Copenhagen 大学での資料閲覧が不可能となった。その代替策として、以下に示す電子版並びに複製版を参照した:

(8) a. 複製版: Nordal (1931)

b. 電子複製版: i) *Handrit.is* 【参照文献一覧を参照のこと】

ii) *The Skaldic Project* 【参照文献一覧を参照のこと】

また、筆者はゲルマン語文献学や古アイスランド語に関してそれほど明るくはないため、*FGT* の内容を理解する上で、次の翻訳版や解説書、古アイスランド語の概説書も援用した:

(9) a. 翻訳・解説書

i) Hreinn Benediktsson (1972). *The First Grammatical Treatise*.

ii) Haugen, Einar (1950/1972). *First Grammatical Treatise: The Earliest Germanic Phonology. An Edition, Translation, and Commentary*.

iii) Dahlerup, Verner and Finnur Jónsson, eds. (1886). *Den første og anden grammatiske afhandling i Snorres Edda*.

b. 概説書

i) Byock, Jesse L. (2013). *Viking Langauge 1: Learn Old Norse, Runes, and Icelandic Sagas*.

ii) Gordon, E. V. (1927). *An Introduction to Old Norse*.

iii) Sweet, Henry (1886). *An Icelandic Primer with Grammar, Notes, and Glossary*.

[Rpt. as (2019) *An Old Icelandic Primer with Grammar, Notes, and Glossary*.]

3.2 古アイスランド語による韻文

古アイスランド語におけるストレスアクセントの姿を探るべく、*Snorra Edda* の一部である *Háttatal* (「韻律一覧」(谷口 1973), Eng.: enumeration of metres or verse-forms) に収録されている詩を韻文資料として参照した(前節にて述べた通り、現物の写本を参照することが不可能であったため、(8) に示した電子版を参照した)。

Snorra Edda は四部構成⁹となっており、*Háttatal* は第四部にあたる。古ノルド語による様々な形式の韻文が具体例とともに示された詩で、全体を通してノルウェー王 Hákon Hákonarson と Skule Bårdsson 侯への頌歌(スカルド詩)となっている。102のスタンザ(stanza, 連)から成り立ち、一つのスタンザは8行から成る。全ての行に三つの押韻が現れる韻律形式で作られている。以下に引く具体例は、スカルド詩ではよく好まれる *dróttkvætt* と呼ばれる頭韻形式(alliterative verse)の一種¹⁰で、各行の際末尾の語が強弱脚(trochee)、つまりは強音節に弱音節が後続する韻脚となっている:

(10) 具体例: 第7スタンザ(英語訳は Faulkes (1987: 171) に基づく)

<i>Hjalms fylli spekr hilmir</i>	The mold king quietens men with Vindhler's
<i>hvatr Vindhlés skatna.</i>	helmet-filler [Heimdall's head, i.e. a sword].
<i>Hann kná hjörvi þunnum</i>	He does make flow the mighty corpse-rivers
<i>hræs þjóðár ræsa.</i>	with slender sword.
<i>Ýgr hilmir lætr eiga</i>	The terrible prince makes men have gore-
<i>öld dreyrfá skjöldu.</i>	stained shields.
<i>Styrs rýðr stillir hersum</i>	The strong ruler reddens lord's iron-grey battle-
<i>sterkr járngrá serki.</i>	shirts.

押韻の具体例を(10)より挙げると、例えば7行目の *Styrs* と *stillir*、8行目の *sterkr* は頭子音連結 *st-*の部分で韻を踏んでおり、また8行目の *sterkr* と *serki* は *-erk* の部分で押韻している。

既に述べた通り、*Háttatal* は8行3強勢のスタンザ102連から成るため、全体を通じて、押韻する語は2448語(102連×8行×3押韻)となる。この2448語が、本研究において考察対象とする古アイスランド語のアクセント資料である。

3.3 現代語のアクセント資料

現代アイスランド語のアクセント資料として、これまでの聞き取り調査を通じて採取した外来語の中から140項目を用いた(調査協力者等の情報は脚注1を参照のこと)。系統的に近縁関係にあるノルウェー語(Sandnes 方言)や、アイスランドと歴史的にも文化的にも強い関連があり、従って、アイスランド語に外来語として流入している割合が高いデンマーク語に

⁹ なお、残りの三部は次の通り(以下に示す概略は谷口(1973: 301-304)を参考にした): 第一部: Prologus (「序文」: 古代北欧の神々に関する神話学的な概説)、第二部: Gylfaginning (「ギェルヴィタぶらかし」: 神々の対話・問答の形式で神話の概観を行う作品)、第三部: Skáldskaparmál (「詩語法」: 詩語、とりわけケニングと呼ばれる比喩を用いた修辞技法などの説明を行う詩)。

¹⁰ 大塚(1987: 182-183)に *dróttkvætt* に関する簡潔かつ要点を押さえた解説がある。

由来する語で、かつ、Sandnes 方言やデンマーク語では第一音節以外の音節に主強勢を有するも語のみを調査項目として選定した。

外来語のアクセント資料の具体例を以下に示す:

- (11)
- (i) *appelsína* [á^hp.pəl.si:.na] 「オレンジ」
cf. Sandnes 方言: *appelsin* [a.pəl.sí:n]
デンマーク語: *appelsin* [a.pəl.sí:'n]
 - (ii) *apótek* [á:.pə(̥).t^hé:k] 「薬局」
cf. Sandnes 方言: *apotek* [a.po.t^hé:k]
デンマーク語: *apotek* [a.po.t^hé:'k]
 - (iii) *banani* [bá:.na.ni] 「バナナ」
cf. Sandnes 方言: *banan* [ba.ná:n]
デンマーク語: *banan* [bɛ.né:'n]
 - (iv) *malaría* [má:.ra.ri(:).a] 「マラリア」
cf. Sandnes 方言: *malaria* [ma.lá:.bí.a]
デンマーク語: *malaria* [ma.lá:'.r^(j)a]
 - (v) *nóvember* [nó̥.vɛm.bɛ̥] 「11 月」
cf. Sandnes 方言: *november* [no.vɛm.bɛ̥g]
デンマーク語: *november* [no.vɛm'.bɛ]
 - (vi) *salat* [sá:.lat] 「サラダ」
cf. Sandnes 方言: *salat* [sa.lá:(^h)t]
デンマーク語: *salat* [sɛ.lé:'t]
 - (vii) *spinat* [spí:.nat] 「ほうれん草」
cf. Sandnes 方言: *spinat* [spi.ná:(^h)t]
デンマーク語: *spinat* [spi.né:'t]
 - (viii) *vítamín* [ví:.ta.mi:n] 「ビタミン」
cf. Sandnes 方言: *vitamin* [vi.ta.mí:n]
デンマーク語: *vitamin* [vi.tɛ.mí:'n]

4. 考察

本節では、前節にて概観した文献や現代語から採取したアクセント資料に基づき、(1a.-c.) に示した三つの問題点の解明を試みることにする。

4.1 古アイスランド語のストレスアクセントは一型体系であった

まず第一の問い (=1a) に関してであるが、論の展開を簡潔にすべく結論を先取りすると、下記の通りである:

(12) 問題点 1: 古アイスランド語のストレスアクセント体系はいかなるものであったか。

現代語と同様に、一型体系であったか、あるいは多型体系であったか。

結論 1: 古アイスランド語のストレスアクセント体系は、現代語と同様、第一音節に主強勢の置かれる一型体系であったと考えられる。

上記の結論に至った論拠は次の三点である。第一に、大変興味深いことに、(7)並びに(8)において紹介した *FGT* それ自体のみならず、(9a) に挙げた *FGT* の解説書のいずれにおいても、ストレスアクセントに関する記述が一切なされていない。この事実は、古アイスランド語のアクセントには学術的観点から特筆に値すべき事柄がないことを示唆していると考えることができ、この推論から、古アイスランド語のアクセントは現代アイスランド語のそれとは差異のない、つまりは第一音節に主強勢の置かれる一型ストレスアクセント体系であったと推定することができる。

第二に、(9b) に挙げた古アイスランド語の概説書では、以下に示すように、古アイスランド語のアクセント（主強勢）が常に第一音節に置かれることを明言している：

(13) a. Stress in Icelandic typically falls on the first syllable of the word, for example *kona*, *gerði*, and *konungr* are pronounced *ko-na*, *ger-ði*, and *kon-ungr*, with stress on the first syllable[sic] (Byock (2013: 330), 斜体並びに太字は原文ママ)

b. The primary accent was always on the first syllable, [. . .]. (Gordon (1927: 269-270))

c. The stress (accent) is always on the first syllable. (Sweet (1886) [Snyder (2019: 4)])

尤も、上記のいずれも自身の記述の根拠は一切示しておらず、その意味においては論拠として希薄ではあるものの、上記の言明から古アイスランド語では現代語と同様に、第一音節に主強勢の置かれていたであろうことは推定可能である。

最後の論拠は、(10) に具体例を引いた韻文資料である *Háttatal* から採取されたアクセント資料である。既に述べた通り、*Háttatal* は三つの押韻を含む行を8つ有するスタンザが120あるため、合計で2448個の語で押韻している（強勢が現れている）ことになる。この2448語を精査した結果、第一音節以外の音節で押韻する語例は皆無であることが明らかとなった（押韻の具体例は第3.2節を参照されたい）。

以上、上記の三種類の文献資料から、古アイスランド語のアクセントは現代語と同様、第一音節に主強勢の置かれる一型ストレスアクセント体系であったと結論づけることができる。

4.2 外来語の流入と現代語における一型体系の保持

続いて二つ目の問題点 (=1b) の考察に移る。問題点と結論は以下の通りである：

(14) 問題点2：現代アイスランド語のストレスアクセント体系は、古アイスランド語のアクセント体系から変化しているか。

結論2：様々な言語から強勢の型の異なる（つまりは第二音節以降に主強勢の置かれる）語が外来語として流入しているが、現代アイスランド語のアクセント体系は第一音節に主強勢の置かれる一型ストレスアクセント体系であり、古アイスランド語のアクセント体系と比べて変化は生じていない。

既に触れた通り、アイスランドは歴史的にデンマークやノルウェーと深い関係にあり、文化的にも多大な影響を受けている。従って、アイスランド語には、自ずとデンマーク語とノルウェー語から、あるいはこの二つを経由して、他言語からも外来語が流入している。また、近年はインターネット等の情報技術の発達により、英語から直に外来語が流入する場合もあ

る。語によっては、元来、第一音節に主強勢（アクセント核）が置かれるものもあれば、アイスランド語に入る前の段階では第二音節以降の音節に主強勢が置かれていたものもある。

筆者は、後者に分類される語がアイスランド語に取り入れられることで、アイスランド語のアクセント体系に何らかの影響を及ぼすか否かを検証すべく、(11) に例示したような外来語 140 項目のアクセント型を精査した。その結果、8 例を除き、全て第一音節に主強勢が置かれていることが明らかとなった（例外に関しては第 5.2 節を参照のこと）。具体例を以下に追加して示す（カッコ内はデンマーク語あるいはノルウェー語 Sandnes 方言）：

- (15) *appelsína* 「オレンジ」 (*appelsin*) *apótek* 「薬局」 (*apotek*)
apríl 「4 月」 (*april*) *banani* 「バナナ」 (*banan*)
bensín 「ガソリン」 (*bensin*) *Évrópa* 「ヨーロッパ」 (*Europa*)
Evóla 「エボラ(熱)」 (*Ebola*) *harmoníka* 「アコーディオン」 (*harmonika*)
kanína 「うさぎ」 (*kanin*) *karate* 「空手」 (*karate*)
kengúra 「カンガルー」 (*kænguru*) *Kóróna-veiru* 「コロナウイルス」 (*Corona-virus*)
makkaróni 「マカロニ」 (*makaroni*) *makrill* 「鯖」 (*makrel*)
malaría 「マラリア」 (*malaria*) *marmelaði* 「マーマレード」 (*marmelade*)
mínuta 「分」 (*minut*) *nátúra* 「自然」 (*natur*)
nóvember 「11 月」 (*november*) *pelíkani* 「ペリカン」 (*pelikan*)
prófessor 「教授」 (*professor*) *rusína* 「レーズン」 (*rosin*)
rabarbari 「ルバーブ」 (*rabarber*) *safari* 「サファリ」 (*safari*)
salat 「サラダ」 (*salat*) *september* 「9 月」 (*september*)
simpansi 「チンパンジー」 (*chimpanse*) *sítróna* 「レモン」 (*citron*)
súkkulaði 「チョコレート」 (*chokolade*) *spínat* 「ほうれん草」 (*spinat*)
tóbak 「たばこ」 (*tobak*) *tómatur* 「トマト」 (*tomat*)
vanilla 「バニラ」 (*vanilje*) *vítamín* 「ビタミン」 (*vitamin*)

また、現時点では次に示す一例にすぎないが、複合語の例も確認されている：

- (16) *piparmynta* [p^hí.par.mìŋ(:).ta] 「ペパーミント」
(< *pipar* [p^hí.par] 「胡椒」 + *mynta* [mìŋ(:).ta] 「ミント」)
cf. *pebermynte* [p^hɛ̃.ɐ.món.tə] (デンマーク語)
peppermynnte [pe(p).pəv.mýn.tə] (ノルウェー語 Sandnes 方言)

上に示した複合語 *piparmynta* 「ペパーミント」は、デンマーク語やノルウェー語 Sandnes 方言では例外的¹¹に後部要素に主強勢が置かれるが、アイスランド語では (15) に示した単純語と同様、第一要素に主強勢が置かれており、第一音節への強勢付与の傾向性が極めて強いこ

¹¹ デンマーク語やノルウェー語 Sandnes 方言では（アイスランド語と同様に）、原則として、前部要素が本来有する主強勢が複合語全体の主強勢を担う（cf. Mimura 2009, 三村 2017）。そのため、後部要素に主強勢の置かれる (16) の *pebermynte* や *peppermynnte* は例外的である。なぜ例外的な振る舞いを示すのかに関しては未だ完全な説明をするには至っていないが、ドイツ語（cf. Mangold 1962）やオランダ語（cf. Sterkenburg ほか 1994）においても後部要素に主強勢が置かれている事実を踏まえると、おそらく「ペパーミント」という語自体が（低地？）ドイツ語からデンマーク語やノルウェー語に取り入れられ、元々の強勢の型が変化せずに残存した結果ではないかと推測している。

とが読み取れよう。

以上から、現代アイスランド語では、アクセント型を異にする外来語の流入にも拘らず(数例の例外を除き)一貫して第一音節に主強勢を付与しており、アクセント体系の変化は生じていないと結論づけることができる。

4.3 一型体系保持の諸要因

前節では、現代アイスランド語のアクセント体系が、種々の強勢の型を有する外来語の流入にも拘らず、中世期の姿を保持し続けていることを確認した。では、なぜ頑なにとも言えるほど第一音節に主強勢を置く一型体系を保持するのであろうか、その背後にはどのような要因が働いているのだろうか。この問いに対する答えは以下の通りである：

- (17) 問題点 3: 仮に変化が見られないとすれば、古アイスランドのアクセント体系を現代に至るまで保持し続ける言語学的な要因やその背後にあるメカニズムは何か。(=1c)

結論 3: 一型体系の維持は、様々な強勢の型を持つ外来語の流入に対して、無標(**unmarked**)のアクセント体系を生み出すべく生じた収束的变化(**convergence**)の結果である。

上記の結論を導くにあたり、以下に示す二つの問いに答える必要がある：

- (18) a. なぜ一型体系なのか(なぜ多型体系ではないのか)。
b. なぜ主強勢は第一音節(左端の音節)に置かれるのか(なぜ他の音節ではないのか、とりわけ右端、つまりは最終音節ではないのか)。

以下、上記の問いに答えるべく詳しく考察していく。

まず一つ目の問いの答えであるが、一型体系の方が多型体系に比してより無標であると考えられる。仮に、音韻論において規則等を用いてより多くの指定(specification)を必要とする現象が有標であると解釈するならば(cf. Hyman (1975: 145), Salmons (1992: 63-65))、アクセント型(強勢・音調の型)や強勢付与規則がより少ないアクセント体系の方が、より無標な体系である(cf. Hyman (1975: 230))、と結論づけることができる。つまり、現代アイスランド語は、外来語が元来有していたであろう種々の強勢の型を第一音節に主強勢の置かれた型へと収束させることで、より無標なアクセント体系を維持しているのである。

続いて二つ目の問いに移る。この問いの答えも、第一の問いと同様、有標性の観点から説明が可能である点に加えて、**経済性(economy)の観点**、換言すれば、**強勢の型や強勢付与規則の記憶、強勢位置の算出等に費やされる労力や負担**の点からも説明することができる。そもそも、第一音節に主強勢の置かれる型は、アイスランド語を含むゲルマン諸語の祖語の段階で既に主流であったと考えられているが(cf. Meillet (1917: 69-78))、種々の歴史的な変化を被ることで新しくアクセント規則を生み出すよりも、ゲルマン祖語のアクセント規則をそのまま受け継ぐ方が、最小限の労力・負担で強勢を付与することが可能となる。また、第一音節、いわば語の端(edge)である音節に強勢を付与する方が、最小限度の労力・負担で強勢の位置の計算・算出を行うことができるため(言うなれば、数える音節数が最小限で済む

ため)、より経済的かつ無標であると言える。

ちなみに、語の端の音節に強勢を付与することが経済性と無標性を確保する方法であるならば、なぜ主強勢が末尾音節 (ultimate syllables) に付与されないのか、という疑問が自ずと生ずる。この問いの答えは現代アイスランド語の形態論から導くことが可能である。第 1.3 節にて概説した通り、現代アイスランド語は形態・統語論の面で古語の姿を色濃く残しており、全ての品詞に複雑な屈折変化が見られる。名詞と形容詞の一部を除き、全ての品詞の末尾音節が屈折語尾であり、語形によっては屈折語尾が脱落することもある。このような形態論的に「不安定な (変化しやすい)」位置に主強勢を付与するのではなく、安定した語幹に主強勢を付与する方がアクセント本来の機能である語の音形を作り出す上で有効であると考えられる。そのため、語の端の音節でありながら、末尾音節への主強勢の付与が回避されていると結論づけることができる。

以上の議論から、無標かつ経済性の高いアクセント体系を維持すべく生じた収束的变化の結果として、現代アイスランド語が一型アクセント体系を有していることが説明される。

5. 結語

5.1 まとめ

本研究の要点並びに結論をまとめる:

(19) a. 古アイスランド語のアクセント体系は、第一音節に主強勢の置かれる型のみからなる一型ストレスアクセント体系であった。論拠は次の二点:

- i) 古アイスランド語で記された文法書や古アイスランド語に自体を扱った文法書、またそれらに関する解説書のいずれにおいても、アクセントに関する言及が一切なされていない。これは古アイスランド語のアクセントに関して特筆に値する事柄がないことを意味し、ここから古アイスランド語のストレスアクセント体系は、現代語のそれと相違がないことが推定される。
- ii) 韻文資料から採取した 2448 項目のアクセント資料を精査した結果、一例として第一音節以外の音節に主強勢は置かれていなかった。

b. 現代アイスランド語の一型ストレスアクセント体系は古アイスランド語の体系を引き継いだものである。種々の強勢型を持つ外来語の流入に反して現代語において一型体系を維持している要因は次の二つ:

- i) 主強勢の位置の指定が一種類である点で無標なアクセント体系である。
- ii) 語の端の音節に主強勢を付与する方が無標で、かつ費やされる労力・負担が最小限であるという点で経済性の高いアクセント体系である (なお、アイスランド語は屈折語であり、語幹以外への強制付与を回避した結果、語末音節には主強勢が付与されない)。

5.2 今後の課題

今後の課題として次の三点が挙げられる: i) 資料の拡充と精査, ii) 現代語アクセント資料

の例外の解釈と資料の採取方法の再検討, iii) 理論の整備。まず一点目であるが、本研究が試論であるという性格上、考察対象とした文献資料の数と範囲は著しく限定されていた。今後は、より多くの韻文資料並びに現代語で記された解説書等を考察対象に加える必要がある。また、現代語のアクセント資料も補充することで、本研究において導いた結論をより確固たるものとしていく必要がある。

第二の課題として、現代語のアクセント資料の例外をどう扱うか、という問題が残されている。本研究で資料として扱った 140 項目の外来語のうち、例外的に第一音節以外の音節に主強勢が置かれていた語が 8 例確認されたことは既に言及した。この 8 例¹²を以下に示す：

- (20) (i) *Bahamaeyjar* [ba.há:ma.èɹ.jar] 「バハマ諸島」
cf. デンマーク語: *Bahamas* [bɛ.héi.mɛs]
- (ii) *espresso* [ɛ(k)s.prɛs.sɔ] 「エスプレッソ」
cf. デンマーク語: *espresso* [e.spɛæ{s}o]
- (iii) *Haíti* [ha.í(:).ti] 「ハイチ」
cf. デンマーク語: *Haiti* [hɛ.í{t}i]
- (iv) *Hong Kong* [hɔŋ.kʰɔŋ(ŋ)] 「香港」
cf. デンマーク語: *Hongkong* [hɔŋ.kɔŋ]
- (v) *Gevalia* [gɛ.vá:li.a] 【コーヒーメーカー名】
- (vi) *mozzarella* [mo.sa.rél.la] 「モッツァレラ」
cf. デンマーク語: *mozzarella* [mo.tso.ʋæ{l}ɛ]
- (vii) *Toyóta* [tɔ.jóɥ.ta] 「トヨタ【会社名】」
cf. デンマーク語: *Toyota* [to.jó:te]
- (viii) *Zaire* [sa.í:r] 「ザイール」
cf. デンマーク語: *Zaire* [sɛ.í:ɐ]

上記の例外をどう解釈すべきか、筆者は未だ満足いく結論には至っておらず、また、そもそも筆者が例外であると判断するに至った観察（聞き取り）に誤りがなかったかどうかに関しても、再度、検討する必要がある。まず、例外的な型の解釈としては、外来語に対するインフォーマントの親密度（馴染みの度合い）が考えられ、親密度が低ければ元々の言語（例えばデンマーク語）の強勢の型が現れる（三村 2014b）、という解釈もあり得る。しかし、外来語に対する話者の親密度は当然のことながら個人差を伴う現象¹³であり、客観的に証明することは甚だ困難であるのに加え、親密度では説明できないような事例も確認されている（例えば、調査当日まで *Hokkaido* 「北海道」という地名はインフォーマントにとって未知の語、つまり日本語はおろか英語やデンマーク語でも「北海道」という語は耳にしたことがなかったにも拘らず、何度発音してもらっても一貫して第一音節に主強勢が置かれていた）のに加

¹² 拙論（三村 2014b）では例外として扱った *lasagna* 「ラザニア」は、後の調査で第一音節に主強勢が置かれていることが明らかとなったため、ここには挙げていない。

¹³ デンマーク語の事例になるが、「天ぷら」という語を採取した際、日本に留学経験もあり日本語教育にも携わっている筆者のインフォーマント（Egholm 氏）は、「一般的には *tempura* と発音するかもしれないけど、自分だったら *tempura* と発音する」と指摘した。客観的な証明が困難であるという問題が未だ残されるものの、親密度や馴染みの度合いが外来語のアクセント型を説明する上で有力であることは明らかであると思われる。

え、*Hong Kong* のように借用元と推定されるデンマーク語とは異なる強勢の型を持つ語も確認されている。借用元の言語の強勢（アクセント）の型が関与しているのではないかという仮説は、例えば *mozzarella* のようなイタリア語由来の例外を説明する上では極めて有効であるが、*makkaróna* 「マカロニ、マカロン」のような反例も存在する。

さらに、例外的な型の解釈に加え、そもそも例外的と判断した筆者の観察に誤りがなかったかという調査自体の不備も可能性として残されている。筆者は、基本的にフィールドワークでは、ごく一般的な記述言語学的な調査方法、つまりはインフォーマントの読み上げた音声を模倣しインフォーマントによる訂正を繰り返し経ることで得られる運動感覚や聴覚印象に依拠した主観音声学的観察を通じて、アクセント資料の採取を行なっている（より詳細な調査方法に関しては中川（1996）並びに同論文の参考文献を参照されたい）。予々指摘してきたことだが、ストレスアクセントの聞き取り調査は思いの外困難を伴うもので、主強勢の位置を特定するためには、音節構造（例えば強勢は重音節に現れやすい）や語全体の音調の型（主強勢の置かれた音節の音程は比較的高く、また音程の変化を伴いやすい）を手掛かりとせざるを得ないことが多々あるものの、外来語に関しては一筋縄ではいかない。特に重音節のみからなる多音節語（例：*Myanmar* 「ミャンマー」、*Hong Kong* 「香港」）や軽音節のみからなる多音節語（例：*Honolulu* 「ホノルル」、*ukulele* 「ウクレレ」）は、リズムによって生じる卓立も加わって、主強勢の位置の特定を一層困難なものにする。このような場合、筆者はインフォーマントに様々なテンポで発音してもらったり、複合語やキャリア文に組み込んで読み上げてもらい音調や卓立の型を一定に保つ等々、聞き取りに関わる諸条件をコントロールすることで主強勢の位置の特定を試みている（注 10 で触れた *lasagna* 「ラザニア」は成功例の一つである）。しかし、果たしてこれらの方法で十分か否か、他に有効かつ信頼性の高い調査方法がないのか検討並びに改善することは喫緊の課題である¹⁴。

最後に、本研究が依拠した「有標性」や「経済性」といった概念ないし理論的枠組みの整備を図ることも緊急の課題である。現代アイスランド語のアクセント体系が示す著しく保守的な姿の背後には、無標で且つより経済性の高い体系を産み出し保持する力が働いていると筆者は解釈したが、この論法が全ての言語に適用可能でないことは、多型アクセント体系を持つ言語の存在を指摘するまでもなく、自明のことである。例えば英語は、古英語の時代にはアイスランド語と同様、（主として）第一音節に主強勢を置く傾向が著しく強かったが、その後、夥しい数の外来語の流入に伴い、現代英語のアクセント体系は（少なくとも具体音声のレベルでは）いわゆる多型体系である¹⁵。今後は様々な系統の言語を視野に入れた通言語的な観点からアクセント変化に関する考察を行い、本研究において提案した「有標性」や「経済性」に基づく解釈の妥当性の検証を進め、理論的な整備を行う必要がある。

¹⁴ 音響分析を行い、*intensity* の数値の高い箇所を主強勢の位置とすればよいのではないかと考える向きもあるが、Ladefoged (2003: 92-93) も指摘するように、*intensity* の数値の高さと *stress* の所在は必ずしも呼応しないため、音響分析は解決策とはなり得ない。

¹⁵ 英語のアクセントと関連づけたこの問題点は、匿名査読者の一方から指摘されたものである

参考資料: アイスランド語史にまつわる重要史実

- ・ 874-930 年: アイスランド入植(cf. *Landnámabók* 「入植の書」, *Íslendingabók* 「アイスランド人の書」, Chapman 1962: 29-41)
 - * 約 1002 人が最初に入植 (ノルウェー: 846 人, スウェーデン: 30, その他 (オークニー諸島・シェトランド諸島・ヘブリディーズ諸島等): 126 人)、最終的に 2~3 万人が移住したとされる。
 - * ノルウェー人入植者の内訳: 北部: 121 人, 南西部: 290 人, 東部: 50 人, 不明: 385 人。
 - * 数百名の入植者に関しては名前が分かっている, 詳細な入植地も判明。
- ・ 1262 年: ノルウェーの植民地
- ・ 1380 (1397?) 年: ノルウェー=デンマーク二重王国による統治 (カルマル同盟)
 - * 1874 年: 自治法を制定 (憲法と財政的独立を承認)。
 - * 1918 年: 同君連合国家として独立 (アイスランド王国)。
- ・ 1944 年: アイスランド独立
 - * デンマークから分離・独立、アイスランド共和国の誕生。
- ・ 1999 年: 第一外国語としてのデンマーク語教育が終了
 - * 英語が第一外国語に採用。
 - * デンマーク語は第二外国語として教育を継続 (必修科目)。

謝辞

本研究の資料収集に尽力してくださったインフォーマントの方々、並びに本研究の基盤である口頭発表の聴衆諸氏に、この場をお借りして改めてお礼を申し上げます。また、本稿に有益なコメントを下された 2 名の匿名査読者の方々にもお礼を申し上げます。

参考文献 * 著者がアイスランド人の場合は、慣例に倣い、ファーストネームに基づいて配列する。

Byock, Jesse L. (2013). *Viking Language 1: Learn Old Norse, Runes, and Icelandic Sagas*. Los Angeles, CA: Jules William Press.

Chapman, Kenneth G. (1962). *Icelandic-Norwegian Linguistic Relationships* (*Norsk Tidsskrift for Sprogvidenskap* Suppl. Bind VII). Oslo: Universitetsforlaget.

Dahlerup, Verner and Finnur Jónsson, eds. (1886). *Den Første og Anden Grammatiske Afhandling i Snorres Edda* (*Samfund til Udgivelse af gammel nordisk litteratur* 16). Copenhagen: S. L. Møller.

Faulkes, Anthony (1987). *Edda/Snorri Sturluson*. London: Dent.

Gordon, E. V. (1927). *An Introduction to Old Norse*. Oxford: Oxford University Press.

Hagstofa Íslands. <https://hagstofa.is/> 【2020 年 12 月 13 日閲覧】

Handrit.is. Landsbókasafn Íslands og Háskólabókasafn. <https://handrit.is/is/> 【2020 年 3 月 13 日最終閲覧】

Haugen, Einar (1950). *First Grammatical Treatise: The Earliest Germanic Phonology. An Edition, Translation, and Commentary* (*Language Monographs* 25). Baltimore/Maryland: Linguistic Society of America. [(1972). Second, revised edition. London: Longman.]

- Haukur Þorgeirsson (2013). *Hljóðkerfi og bragkerfi: Stoðhljóð, tónkvæði og önnur úrlausnarefni í íslenskri bragsögu ásamt útgáfu á Rímum af Ormari Fraðmarssyni*. Reykjavík: Hugvísindastofnun Háskóla Íslands.
- Hreinn Benediktsson (1959). "The vowel system of Icelandic: A survey of its history." *Word* 15, pp. 282-312.
- Hreinn Benediktsson (1972). *The First Grammatical Treatise*. Reykjavík: Institute of Nordic Linguistics, University of Iceland.
- Hyman, Larry (1975). *Phonology: Theory and Analysis*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Kjartan G. Ottósson (1986). Indicier på tonaccentdistinktion i ældre isländska. *Íslenskt Mál* 8, pp. 183-190.
- Kristján Árnason (1980). *Quantity in Historical Phonology: Icelandic and Related Cases*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 川上 葵 (1995). 『日本語アクセント論集』. 東京: 汲古書院.
- Ladefoged, Peter (2003). *Phonetic Data Analysis: An Introduction to Fieldwork and Instrumental Techniques*. Oxford: Blackwell.
- Mangold, Max (1962). *DUDEN Aussprachewörterbuch (Der Große Duden Band 6)*. Mannheim: Bibliographischen Institut, Dudenverlag.
- Meillet, Antoine (1917). *Caractères Généraux des Langues Germaniques*. Paris: Librairie Hachette.
- 三村 竜之 (2014a). 「ノルウェー語 Sandnes (サンネス) 方言における音調のアクセント論的解釈」. 『室蘭工業大学紀要』 第 63 号, pp.77-91.
- 三村 竜之 (2014b). 「アイスランド語ストレスアクセント試論」. 『日本言語学会第 148 回大会予稿集』, pp.158-163.
- 三村 竜之 (2016). 「アイスランド語における無声歯茎ふるえ音の音韻論的位置付け」. 『室蘭工業大学紀要』 第 65 号, pp. 59-66.
- 三村 竜之 (2017). 「複合語のアクセントと意味・就職構造: ノルウェー語 Sandnes 方言を通じて見た諸問題」. 『室蘭工業大学紀要』 第 66 号, pp.129-138.
- 三村 竜之 (2020). 「アイスランド語のアクセント史の構築に向けて」. 日本音韻論学会音韻論フォーラム 2020 (2020 年 8 月 29 日, ZoomMeeting により開催).
- 三村 竜之 (2021 近刊). 「アイスランド語アクセント史の構築に向けて」. 『音韻研究』 第 24 号.
- Mimura, Tatsuyuki (2009). *Issues in Danish Word-Prosody: A Synchronic Description*. 未公刊博士学位請求論文 (東京大学大学院人文社会系研究科, 2010 年 3 月受理).
- Myrvoll, Klaus Johan, Trygve Skomedal (2010). "Tonelagsskilnad i islensk i Tridje grammatiske avhandling." *Maal og Minne* 2010 (1), pp. 68-97.
- 中川 裕 (1996). 「フィールドワークのための音声学」. 宮岡伯人編. 『言語人類学を学ぶ人のために』. 東京: 世界思想社, pp. 62-94.
- Nordal, Sigurður, ed. (1931). *Codex Wormianus (The Younger Edda)*. MS. No. 242 fol. in the University Library of Copenhagen (*Corpus codicum Islandicorum medii aevi* 2). Copenhagen: Levin & Munksgaard.
- 大塚 光子 (1987). 『アイスランドサガ スールの子ギースリの物語』. 東京: 三省堂.
- Robins, Robert Henry (1979). *A Short History of Linguistics*. 2nd ed. London and New York: Longman.
- Salmons, Joe (1992). *Accentual Change & Language Contact: Comparative Survey and a Case Study of Early*

Northern Europe. Stanford: Stanford University Press.

清水誠 (2012). 『ゲルマン語入門』. 東京: 三省堂.

The Skaldic Project. <https://skaldic.abdn.ac.uk/m.php?p=skaldic> 【2020年3月15日最終閲覧】

Sweet, Henry (1886). *An Icelandic Primer with Grammar, Notes and Glossary*. Oxford: Clarendon Press.

[Rpt. as Snyder, Patrick T., ed. (2019). *An Old Icelandic Primer with Grammar, Notes and Glossary*. 出版地不詳: Tiw's Arm.]

Sterkenburg, P. G. J. vanほか監修 (1994). 『講談社オランダ語辞典』. 東京: 講談社.

谷口幸男 (1973). 『エッダ 古代北欧歌謡集』. 東京: 新潮社.

上野善道 (1980). 「アクセントの構造」. 柴田武編. 『講座言語第1巻 言語の構造』. 東京: 大修館書店, pp. 87-134.

上野善道 (1986). 「伊吹島方言のアクセント核の担い手」. 『東京大学言語学論集 '86』, pp. 15-44.

上野善道 (1989). 「日本語のアクセント」. 杉藤美代子編. 『講座日本語と日本語教育2 日本語の音声・音韻 (上)』. 東京: 明治書院, pp. 178-205.

Uwano, Zendo (2012). "Three types of accent kernels in Japanese." *Lingua* 122, pp. 1415-1440.

執筆者紹介

氏名: 三村竜之 (みむら・たつゆき)

所属: 室蘭工業大学ひと文化系領域・准教授

Eメール: m76tatsu@gmail.com